

ドイツの対外言語普及と日本におけるドイツ語教育

山川智子

1. はじめに

対外言語普及はドイツの対外文化教育政策に含まれており、外交政策の重要な柱の一つである。敗戦国ドイツは、負の過去を乗り越える必要があり、対外言語普及には困難を要した。ドイツは「過去の克服」を目指し、歴史認識や社会科学科目の教育を見直しながら国際社会の信頼を取り戻してきたが、その過程でドイツの自国語普及に対する考え方にも変化があらわれてきた。

本発表では、ドイツの自国語普及の変容を、ドイツ語とドイツ文化の普及機関であるゲーテ・インスティトゥート(GI) <注1>の活動とともに振り返り、現代ヨーロッパの言語教育の理念である欧州評議会の「複言語・複文化主義」と関連づける。続いて、日本におけるドイツ語教育の現状から今後の展望を考える。GIは異文化間の対話を促進し、民主主義と平和構築に貢献するという理念を掲げている。この理念は、ヨーロッパにおける民主主義的価値観の共有、法の下での平等、および人権の尊重という理念を掲げ、言語教育政策を先導する欧州評議会の姿勢とも重なる。ドイツの対外言語普及を「複言語・複文化主義」と関わらせつつ検討することで、普及先の人々をリスペクトする意義、多様性への気づき、および国際文化交流における言語の役割を考えたい。

2. ドイツ語のイメージと話者の意識

ドイツ語は、ドイツやその周辺国で公用語、もしくは地域公用語とされており、話者人口が約1億2,500万人の言語である。EU加盟国内では母語話者数が最も多い。とはいえ、言語普及という視点から見ると、ドイツは植民地支配の時代が比較的短く、二度の世界大戦に敗れ、ナチ時代に対する反省もあり、イギリスやフランスに比べ、自国語の国外普及を積極的に展開できなかった(アモン<檜枝・山下訳>1992)。ドイツ語のイメージがヒトラーと重ねられたため、ドイツ語という言語そのものに対するイメージがあまり良いものではなかった(スライナー<由良・他訳>2001、クレムペラー<羽田・他訳>1974)ことも理由に挙げられる。

ドイツ語普及に影響を与える要素の一つに、ドイツ語話者のドイツ語との向き合い方を指摘する研究もある(Krumm 2003)。また、元GI所長のリンバッハ(Jutta Limbach 1934-2016)は、ドイツ語話者が対外的な交渉で英語を使いすぎることは「間違った慎重さ」(Limbach 2005:4)であると指摘した。言語に対する姿勢は話者の思考方法にも影響を与えるので、ドイツ語使用を控えるという行為はドイツ語圏の社会全体にとって不利益をもたらすことになるからである(Limbach 2005)。

自国語普及に消極的な傾向がある中でも、ドイツ語を積極的に使用し、その姿勢を発信する政治家もいた。たとえば1980年代には、当時のコール首相(1930-2017)が、経済力や話者数に見合うだけのドイツ語の地位を獲得しようとした(Ammon 1991)。21世紀に入ってからは、2009年9月、当時の外務大臣に就任する直前のヴェスターヴェレ(1961-2016)が、英語で返答を求めるイギリスのメディアに対して「イギリスでは英語が話されるのが普通であるように、ドイツではドイツ語が話されるのが普通です」<注2>と答え、これも注目された。

ドイツ語話者が英語を積極的に使用するという事実を短期的な視野で考えると、ドイツ語普及の成果としては否定的側面が強調されてしまう。しかし、この事実を長期的な視野で捉えると、異なる視点からの考え方が浮かびあがる。つまり、ドイツ語話者が、ドイツ語を前面に出さず、まずは相手をリスペクトし、「複言語・複文化主義」を率先して実践した結果、英語を使用しているとも考えることができる(山川2019)。ドイツ語話者の前向きな気持ちをどう保つかという課題を、欧州評議会の「複言語・複文化主義」(Council of Europe 2001)と関連させて考察することで可能性が拓けるのではないかと。

3. ドイツ語普及における「複言語・複文化主義」の視点

(1) ドイツ語普及機関GIの現代史的意義

2021年時点で、ドイツ国内の12か所を含み、98か国158か所にGIが設立されている。世界のドイツ語学習者数は約1550万人、約22万3000人がGIで学んでいる(Goethe-Institut 2021)。現体制のGIはドイツ語教員への研修の場の提供を主たる目的とし、1951年に設立された。「過去の克服」の一環で、GIは「控えめな出発」(Kathe2005:86)をし、ドイツの対外的な信頼を取り戻しながら、ドイツ語学習者を増やしていった(Lentz et al. 2021、中山2008)。ドイツにおけるGIの設置場所も、大都市ではなく、地方の小さな町が選ばれた(Kathe2005、Lentz et al. 2021)。ナチスを連想させるような場所ではなく、GIの由来となったゲーテをはじめ、豊かな文化や芸術を生み出した頃のドイツを、まずは学習者に知ってもらう必要があったのだ。国外にもGIを設立する計画が

立てられ、たとえば日本では、東京（1962年）、京都（1963年）、大阪（1964年）にGIが設立された。

対外言語普及には、その言語や、言語が話されている地域の肯定的なイメージを高めること、さらに普及先へのリスペクトが必要である。この考え方は敗戦国ドイツに限らず、ヨーロッパ各国の言語普及機関で共有している。2005年、GIをはじめとするヨーロッパ各国の言語普及機関が、スペインの「アストゥリアス皇太子賞」を受賞した。この同時受賞は、各国の言語普及が、かつての植民地主義的な言語普及から、国際交流、平和構築に資するための言語普及へと転換したことを印象づける象徴的な出来事となった。

(2) GIが実践する「複言語・複文化主義」的なドイツ語普及：他者へのリスペクト

戦後のドイツは、意識的に「複言語・複文化主義」的なドイツ語普及を行っていると言える。GIがそうしたドイツ語普及を先導している。「複言語・複文化主義」は、多様なことばや文化に触れた時、何らかの心の変化が生じたことに気づかせてくれる考え方である。言語を社会的文脈に位置付けて考え、相手をリスペクトし、その相手のことばや文化を学ぶことが平和構築につながるという信念に基づく考え方とも言える。

欧州文化条約（1954年）では、自国の言語、文化、歴史を他の加盟国に知らせ、他の加盟国の言語、文化、歴史の学習と研究を自国で進めることが奨励されている。「複言語・複文化主義」が紹介されているCEFRでも、「他の国や地方で一定の社会グループが共有している価値観や信念、例えば、宗教上の信条、タブー、その他前提とされる共通歴史認識などを知っていることは、異文化コミュニケーションの基本的条件である」（吉島・大橋他訳：11）と明記されており、歴史認識を共有することが言語普及の前提となっていることが確認できる。

ヨーロッパ発祥のCEFRは、いまやヨーロッパをこえ、世界各地で関心を集め、言語教育の現場で活用されている。確かにヨーロッパとは言語教育の状況、地域の事情は異なるが、戦争再発を防ぎ、平和を築くという「複言語・複文化主義」の理念は普遍的なものと考えられているからであろう。

一方で、国際文化交流に真剣に取り組むほど、矛盾も生まれることは川村（2005）でも指摘されている。言語普及においても摩擦や対立を生むことがある。この現実があるからこそ、偏見や誤解が生じるのを少しでも防ぎ、無意識の固定観念から脱却するため、相手へのリスペクトの気持ちを持つことをGIは意識する。そのためには、他者の視点、複眼的な思考が必要であり、「ドイツ語」教育や「英語」教育といった語種をこえた連携のもと、歴史教育にもつながる学際的な視点で教養を高めていくことが求められる（杉谷2019）。GIには、普及先の固有の文化や芸術が、ドイツ語やドイツ文化と交わることで、新しい視点で捉えなおされるという「掛け算」的発想がある。国際文化交流においては「個人」が主体となるので、一人ひとりの考え方、他者との交流の進め方によっては、結果をいかようにも変容させることができる。この点も「複言語・複文化主義」の本質であると言える。

4. 日本におけるドイツ語教育：現状と展望

日本におけるドイツ語教育の目的、および学習者の姿勢も、時代とともに変容している。2010年以降に行われた大規模な調査として、全国の大学・短期大学・高等専門学校・高等学校におけるドイツ語教育についての調査結果がある（日本独文学会 ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会 2015<注3>）。この調査によると、学習者がドイツ語を履修する理由として多かったのは「ヨーロッパに対して憧れがあるから」「ドイツ語圏に旅行したいから」「ドイツ語自体に興味があるから」「ドイツ語圏に友人・知人がいるから」というものであった。たとえ漠然としたものであっても、ドイツ語圏地域に対する関心からドイツ語を学び始めたことが理解できる。ドイツ語を学ぶ意義としては、「教養を高め、人間的視野を広げる」「外国語学習を通して異文化を理解する能力を養成する」と考える学習者が多い。教養を身につけることを、一定数の学習者が意識していることが分かる。さらに、学習者がドイツ語の授業で何を学びたいかに関しては「日常的な会話」「聞いた内容をだまかに理解する」「大意をつかんで読む」「正確に読み解く」「正確に聞き取る」「自分のことを表現する」「日本語に訳す」「ドイツ語圏の社会・文化に関する知識」という回答が見られた。ここからは、個々の学習者のニーズが多様化し、授業への期待がまちまちである一方、教員の工夫次第で学習者の動機づけを高めることもできることが読み取れる。

ドイツ語の国際的な位置づけも変化し、戦前のような影響力もなく、日本でのドイツ語普及には課題も多い。しかし、日本が東アジアで果たす役割を考える時、ドイツが信頼を回復した過程をドイツ語で学ぶことは意義深い。学習者の生い立ちや学習歴も多様化した現代においては、学習者が頼りにする翻訳ソフト等も活用し、生活に役立つ能力（知識を吸収するだけでなく、適切に発信する能力）を育むことにも注力していきたい。

5. おわりに

「過去の克服」を目指してきた現代ドイツの対外言語普及には、前向きな意味が加わっている。負の過去を背負い、ドイツ語使用に慎重になるというのではなく、普及先の人々に対するリスペクトを持ち、現地の言語と文

化を尊重しつつドイツ語教育を行うというものである。GI も実践する「複言語・複文化主義」的な普及である。

ドイツの対外言語普及の姿勢から日本が参考にできるのは、歴史との向き合い方や近隣諸国との関係の築き方、および「正解」の見えにくい現場での対応力ではなからうか。ドイツ語教育の意義も時代とともに変容し、学習者の背景も多様化しているため、明確な方向性を示すことが難しくなっている。対外言語普及の基本は、一人ひとりの言語と文化への向き合い方にあるので、個々の教員がそれぞれ、自身の実践の意義を考える必要がある。

「複言語・複文化主義」は、言語を社会的文脈に置き、相手に歩み寄り、関係を構築していこうとする。この姿勢は、現代の国際文化交流の方針にも合致する。異文化理解の本質を問う「複言語・複文化主義」は、互いをリスベクトすることからはじまる。対外言語普及は、「言うは易し、行うは難し」ともいえる実践を地道に続けることにある。教育現場での実践に関しても、粘り強く議論を重ね、関係者間で互いに接点を見出していきたい。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 JP19K00796、JP20H01293 の助成を受けたものです。

注（URL は 2022 年 3 月 31 日現在）

注 1：Goethe-Institut の HP で、GI の活動方針や理念、ドイツ語学習のための素材、および個々の文化活動の事例も紹介されている。<<https://www.goethe.de/de/index.html>>

注 2：“Deutsch mit Westerwelle – neue Kampagne startet“ Welt-Online 25.02.10 „Sprache der Ideen“

<<https://www.welt.de/politik/deutschland/article6553241/Deutsch-mit-Westerwelle-neue-Kampagne-startet.html>>

注 3：日本独文学会の HP で全文を閲覧することができる。<<https://www.jgg.jp/mod/page/view.php?id=113>>

参考文献

アモン、ウルリヒ（檜枝陽一郎・山下仁訳）（1992）『言語とその地位』三元社

川村陶子（2005）『『文明の衝突』と国際文化交流』成蹊大学文学部国際文化学科編『国際文化研究の現在—境界・他者・アイデンティティ』柏書房、51-74 頁

クレムペラー、ヴィクトール（羽田洋・他訳）（1974）『第三帝国の言語「LTI」—ある言語学者のノート』法政大学出版局

杉谷眞佐子（2019）『『異文化理解』と『視点を変える力』の育成：ドイツの『歴史』教科書にみられる図像資料から考える』『関西大学人権問題研究室紀要』関西大学人権問題研究室、2019 年、77 巻、1-35 頁

スタイナー、ジョージ（由良君美・他訳）（2001）『言語と沈黙—言語・文学・非人間的なるものについて』せりか書房

中山あおい（2008）「ドイツの対外文化政策と言語教育—ゲーテ・インスティトゥートの言語・文化交流プログラムに焦点を当てて」日本比較教育学会『比較教育学研究』37、15-25 頁

日本独文学会 ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会（2015）『ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査報告書』

山川智子（2019）「現代ドイツの対外文化政策における「複言語・複文化主義」—国際文化交流の理念と今後の課題」文教大学大学院付属言語文化研究所『言語と文化』31、115-145 頁

Ammon, Ulrich (1991) *Die internationale Stellung der deutschen Sprache*. Berlin: Walter de Gruyter.

Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Council for Cultural Co-operation Education Committee Modern Languages Division, Strasbourg, Cambridge University Press. <吉島茂・大橋理枝・他訳編（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』東京：朝日出版社>

Goethe-Institut (2021) *Jahrbuch 2020/2021*.

Kathe, Steffen R. (2005) *Kulturpolitik um jeden Preis. Die Geschichte des Goethe-Instituts von 1951 bis 1990*. München: Martin Meidenbauer.

Krumm, Hans-Jürgen (2003) „Deutsch im Konzert der Sprachen. Die Rolle der deutschen Sprache in Konzepten europäischer Mehrsprachigkeit.“, in: Hans Jürgen-Krumm (Hrsg.) *Sprachenvielfalt. Babylonische Sprachverwirrung oder Mehrsprachigkeit als Chance?*, Innsbruck; Wien; München; Bozen: Studien Verlag, 165-180.

Lentz, Calola und Marie-Christin Gabriel (2021) *Das Goethe-Institut: Eine Geschichte von 1951 bis heute*. Klett-Cotta: Stuttgart.

Limbach, Jutta (2005) „Berliner Lektion: Ich liebe unsere Sprache.“ Berlin: Goethe-Institut.